



首提灯

試し読み

風呂の景

女湯で一人か二人ほえて居る

宝十三義²

【小梅婆さん】

がらりと障子を開けると番台に座った番頭が挨拶を寄越した。

「小梅さん、今日はまた遅いじゃないか」

「ナニ、今日はちよいとサ」

小梅婆さんは八文の湯銭を渡しながら溜め息を吐く。今日は夕刻前には珍しく患者が途切れた。暫く誰も来なかったのでもろそろ仕舞いかと道具を片付け始めたところで、血まみれの子供を抱いた父親が真っ青な顔をして飛び込んできたのだ。べつとりと腕についた血を洗い流してみれば、深くはないがそこそこ長い傷。怪我をしたことが恐ろしかったのか、痛いとも泣きもしない子供だったが、傷を縫い合わせ始めたところで、火がついたように大泣きし始めた。おろおろする父親を叱り飛ばして、子供を宥めさせながら押さえつける。可哀想だったが、傷を縫わないでいる方が余計に危ない。やっとひと段落して子供も落ち着いたのか、勘造の長屋の隅で父親に付き添われて寝入ってしまった。そこでやっと湯に出てきたというわけだ。

「おやおや。そりや大変でしたね。ゆっくり汗を流して行って

ください」

「アイ、おかたじけ」

小梅婆さんは脱衣籠に着てきた着物と浴衣を脱ぐと洗い場に行く。無口な湯汲みの男に湯を汲んでもらいざつと被つて柘榴口を潜り湯に浸かった。仕舞湯間近だからかそこそこ人が入っている。皆ぼうとどこを見るでもなく宙を見つめていた。男湯では誰かがほろ酔い気分なのか、稽古のおさらいか、もにやもにやと常磐津のようなそうでないような唸り声が聞こえてきた。

「不景気な。あれじゃア常磐津だか念仏だか知れやしねエ」

常連らしい婆さんがち、と舌打ちをした。おやおや。小梅婆さんはこつそりと溜め息を吐く。どうやら腹の虫の居場所が悪い人が居るらしい。湯船の中は流石に薄暗く、少し離れるとどこに誰がいるのかも判らない。もわもわと湯気ばかりが顔を撫でていく。

「あいた！」

わずかばかり静寂が続いた風呂の中に、悲鳴が上がった。皆が湯気を透かして何事かと何う心配がした。なんののかんと揉めているような声かしたと思うと、一際大きい声が響く。

「すまねえで謝った気とはいっすすさまじいや。うぬが買切った風呂じゃあんめえし、人様の手を思う様踏んづけといて、手に気をつけたア、あんまりな仕打ちだ。ちとらア人は人だと思つて湯が熱かろうが、埋めれば気にくわねエだろつと我慢して入っているくれえだてえのに、うぬが好きに入りたけりや五右衛門風呂でも据えたがいい」

くだくだしい長口舌を聞いたせい、風呂の中に気まずさと緊張が走る。声はさつき男湯の長唄に文句を言った婆様らしい。相手は声が小さいのか何を言っているのか聞き取れないが、謝っているようだ。が、相手の婆さんが許さずにあれこれと言いついて立っている。

やれやれ。

火事の危険性から、内風呂が簡単に持てないのが今の時代だ。だからこそ湯屋は誰にとつても一日の汗を流してさっぱりする所だ。それは今文句を言い立てている婆さんにとつても同じことだ。だが、勝手も遠慮も自分ばかりと思つているところ言うことになる。

「落ち着けたア誰に向かつて言いやがる、このしわくちや婆アめ。うぬが筋が通らねえことを抜かしやアがるから道理を説いてやつてゐるのだわエ。それをなんだナ……」

婆さんの小言は終わらない。大方機嫌でも悪かった八つ当たりもされているのだろう。だが、いい加減この婆さんの癪に障るような声も聞き飽きて来た。

「お前も随分な無体を……」

「無体だつて、洒落たことを抜かしやアがる。お前が不注意で人の手を足蹴にして謝らねえものを。人をつけえにしてわつちが無体とは恐れ入らア。サア、どこが無体だ、言つてご覧ナ」
だんだんと婆さんに言われつばなしだった相手も、声が大きくなつてきて、小梅婆さんはぎよつとした。

「何が道理だ、いけふさぶさしい。手を踏んだなアこつちのあやまりサ。腰負つて謝つたじゃねえか。それを何時までもべしや

べしやと。つけえが聞いて呆れらア」

ザバザバと湯を掻き分ける音がしたと思うと、上がり口近くの小梅婆さんに盛大に湯を掛けながら、一人の婆さんが「あがりだヨツ」と乱暴に断つて出て行つた。

やれやれ、と一息つく間もなく、もう片方の婆さんが、こちらにも乱暴に湯を蹴散らしながらつっけんどんな口調で「ハイ御免なさいやし」とまたいでいく。お陰で鬨からびっしよりと濡れてしまった。

「なんだナ、はねが掛かったじゃねえか」

流石の小梅婆さんもムツとして文句を言う。

「だからごめんせえと言いやす。入口に座り込んで、掛かるも掛からねえも、うぬから掛かる気じゃアねえか。掛かるが悪きやア奥へ退いているがいい。大体湯水を使うとこだ。これが火だつてエなら火傷でも出来ようが、たかが湯じゃねエか。いけツ大層な」

小梅婆さんの声も多少は大きかったかも知れない。だがその矛先がこちらに向いて来ようとは思つていなかった。しまったと思つたが既に手遅れだ。しかも散々文句を言つていた方の婆様だ。倍はしっかり言い返される。

「三軒両隣の付き合いをしらねえ、とんちきめ」

だが、石榴口を潜りながらのこの捨て台詞には流石にカチンと来た。かつと頭に血が上つて、思わず後を追いかけて風呂を出る。その途中で上がり湯を手近の桶に汲んだ。

「おい」

普段は喋らない信濃出だと言う湯汲みが存外低い声で、小梅

【窪塚】

「粹なゆかりと我ながら、我つま琴を掻きならず、思いの丈の尺八も、一夜ぎりとはきにかかる」

総檜造りで、しかも建てたばかりで木の香りもまだ新しい。そこへ沸かしたての湯。豪華な風呂だ。窪塚兵衛は、機嫌良く清元を鼻歌で歌いながらざぶりと真新しい湯に浸かる。

「ウ、堪えられねえ」

ふう、と溜め息を大きく吐いた。

「流石に今流行りの杉長押すぎながしだなア」

『杉長押』はこのごろ美味しい魚を食わせるというので有名な料理茶屋だ。ほんの数年前に出来たのだが、有名店の八百善や平清もその腕を褒めたという料理人だとかで、引き札の宣伝も手が込んでいた。店の構えは二階建てで、一つ一つの座敷にそれと判らぬように、ただ判る人間が見れば相当に贅沢な作りだと判るようになっていらい。庭もかなり凝って作り、茶室、数奇屋が離れ小島のように作られて、絶妙な配置の植え込みや木々で、他から見えるようなこともない。一階と二階にある大座敷には、床脇の長押から床の間の落とし掛まで一本の長い、皮付きのままの杉を使っているからつけた名前らしい。樹齢を重ねた幹がいい具合に風情があるのが自慢だと言う。今ではそこいらの大店の主人や通人でもちよつと名が知れている程度では、そうおいそれとは入れない程の店になっている。そもそもその値段が高いこともあるが、ちよつと小銭を持っている程度の、

物珍しさだけで一度や二度しかこない客に忙しくされるよりも、杉長押をきちんと判った客に来てもらいたい、そう言うことであるらしい。

そんな店に、火附盗賊改めでも一介の与力である窪塚が何故居るのか。本来なら自ら探索などに出る必要はないのだが、まるきり自分とは違う人物になりきるのが面白くて、同心やお頭、そして用人の槇田に嫌がられながらも続けている。そんな与力など、言ってみればお店の小僧、大通人どころか半可通のはの字程度の存在だ。到底この店が来てもらいたいと思う客ではない。だから、来て貰いたいと思われるような客になることにしたのだ。

話は少しさかのぼる。文政二年、三橋会所さんきょうかいしよが解散になった。三橋会所は菱垣廻船十組とくぐみ問屋が永代橋、新大橋、大川橋の三つの橋の架け替え修繕のために幕府に願い出て許された会所だ。元々菱垣廻船の再建、経営不振になった仲間への融資、幕府に十組問屋の再編を認めてもらうのが目的だった。この会所は寄合と称して『伊勢太』と言う料理茶屋に上がり、一月数十両から、多いときは数百両の飲食代を使ってきた。余りに豪遊したため、伊勢太の方でも会所以外の客を断ったと言われるほどだ。のちにこの会所の元金を幕府の米価調整に使われて大きな損を出したため、解散させられた。伊勢太はその煽りを食ったか、だんだんと衰退していく。

その三橋会所のように再び不正などが行われているのではな
いか、と疑われる動きがあり、その真偽を確かめるために窪塚

は問題の寄合が行われているという『杉長押』に客として来たというわけだ。

そう簡単には入れない杉長押へは、窪塚は以前世話になった金波楼の主人に頼んで座敷を取ってもらった。金波楼も以前探索に入り込んだことがある。それなりに疑わしく、ちよつと町奉行所にも「畏れながら」と訴えれば営業停止とはいかなくても、大分困った立場に立たされることになる。その事実を目を瞑るからと無理矢理貸しを作っておいたのだ。

だからと言って、火附盗賊改めの与力らしく威勢と剣呑な雰囲気でも無頼の輩や浪人は得意だが、高級な料理茶屋が歓迎する上客となるにはちよつと無理がある。そこで、一計。遠国の豪農の跡取りが市場視察と言う名目で江戸に出てきた、と言う体にした。多少洗練されていなかろうが、何とかそれで押し切れるだろうと考えてのことだ。

それが大当たりで、杉長押では一步入った途端、下へも置かぬ扱い。高級な料理茶屋なら設けていたと言う、自慢の風呂にも案内してくれた、と言うわけだ。

杉長押が気を利かせて、座敷に芸者衆が呼ばれている。ゆつくりと風呂に入り、芸者と酒宴を楽しみ、まずは客になりきらなければならぬ。

全ては探索のためだ。この豪勢な風呂や贅沢な料理などは余禄でしかない。まあ、大きな余禄ではあるが。

ふふん、と鼻歌が洩れた。その時、風呂の戸がかりと開く。一応窪塚は上々客の扱いであるはずで、相客が来る気遣いはないはずだ。

「随分とご機嫌ですね」

掛かった声にびくりと体が強張った。まさか、この声は……。

「ま……っ、榎田……さん……」

用人の榎田が上がり口でにつこりと微笑んでいた。

マズイ。窪塚は咄嗟の言い訳も何も浮かんでこなかった。こうした探索で使った掛かり（費用）は後で火付盗賊改に請求をまわす。月末に世話になっている船宿に請求が届くので、それを勘定方へ渡し、勘定方から支払いが行われるのだ。

火附盗賊改めは元々御先手組が加役として任命されている役目だ。探索や与力、同心、内役（の勘）などの俸給や諸々の必要経費は、幕府が予算を出してくれたりするわけではなく、お頭が自分の役料から身銭を切るのだ。当然そこには上限と言うものが存在する。一方、窪塚が支払いを回すのは、やたら手の込んだ料理を出す店だから、当然金額も大きい。となればそんな掛かった理由を聞かれるわけだが、最近では窪塚より年下の勘定方などでは簡単に言いくるめられてしまう。そこで、窪塚の出すものは榎田が目を通すようになっていく。そうなると、探索とは言え高級料理茶屋の座敷に上がり飲食をするな、飲食をするなら自腹を切れと言う小言をされることになる。最も最近の小言の時は、その場しのぎになんのかんと言って、逃げたような覚えだけがある。

「なにかおかしいと思えば、これですか」

いつもは寝ているのかと思うほど目が細められているのが、今にも大きく見開かれそうだ。これは大変によろしくない。目の開いた榎田は本気で怒っている証拠だからだ。そして榎田だ

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)